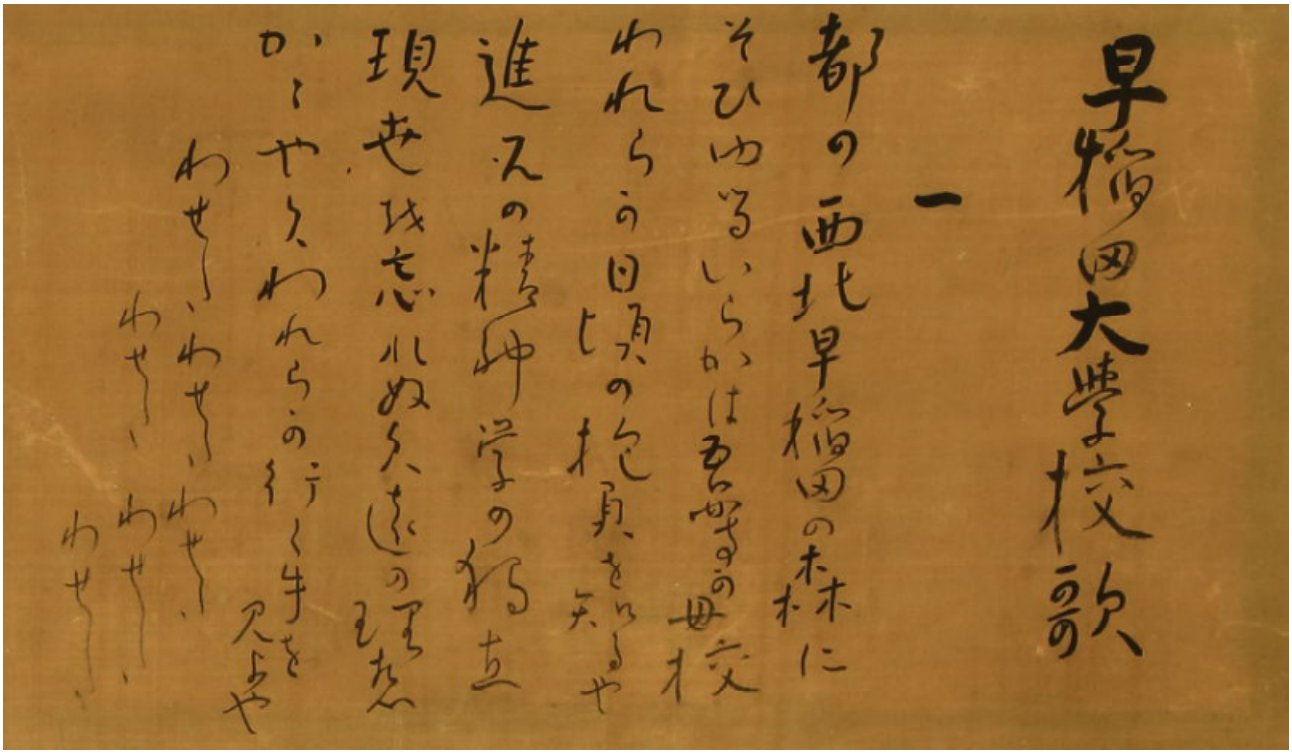
ふみくら

No. 84
2013. 10. 21

早稲田大学図書館報



『早稲田大学校歌』(部分) ＜本文p12 参照＞

《目　次》

＜開催報告＞
新入生歓迎イベント「LibraryWeek」 ・・・・・・・・ 2
利用者支援課・戸山図書館
「玉篇」を携帯してきた僧のこと ・・・・・・・・・・・・・・ 6
久保尾　俊郎（特別資料室）
相馬御風歌幅「はちの子に」 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
松本　智子（特別資料室）
2012 年度図書館主催展覧会報告 ・・・・・・・・・・・・ 10
展示委員会
最近の大口寄贈図書報告（2011.1－2013.6） ・・ 11
資料管理課
図書館だより ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

＜開催報告＞ 新入生歓迎イベント「Library Week」

利用者支援課・戸山図書館

◆イベント開催に至るまで

図書館ではここ数年、初年次教育の支援を強化してきている。具体的には授業の支援や図書館ツアーを数多く実施し新入生に大学において図書館を利用する意義を伝えてきた（この点については近年、本誌で報告しているので適宜参照して欲しい）。しかし一方で、支援の数が増えるに従って、実施側のマンパワー不足が課題となってきた。また、中央図書館内でのツアーに伴う騒音や混雑も課題として指摘があった。

そこで、まずツアーを「引率型」から「セルフ型」へ変更できるかを検討した。授業によっては館内ツアーと図書館利用指導が授業の一部に組み込まれているものもあり、それに代わりうる内容が求められた。検討を重ねるうち、いっそ多少の騒音が出ても可とする期間（週）を設け、大々的に図書館でイベントを行うこととし、「授業の一環」という視点から「広く新入生を歓迎する」イベントを実施してはという発想に変化していった。

結果として、2013 年 4 月 13 日（土）から 19 日（金）の 1 週間に中央図書館と戸山図書館で合計 13 のイベントを集中して開催する「Library Week」（以下、LW）を実施することとなった。以下に各イベントを簡単に報告する。

＜掲示したポスター＞

1. 中央図書館セルフツアー

これまでの図書館職員による引率型ツアーを、スタンプラリー形式のセルフツアーとして実施した。参加者が受付にてツアーマップとスタンプカードを受け取り、それを基に館内 10 か所に設置されたスタンプポイントをめぐることにより、図書館サービスや資料の特性について学ぶことを目的とした。

準備段階では、図書館が持つ多種多様なサービスの内容や資料の情報を10か所のスタンプポイントに集約することに苦労したが、新入生が図書館を利用する際にまず必要な情報は網羅できたと考えている。

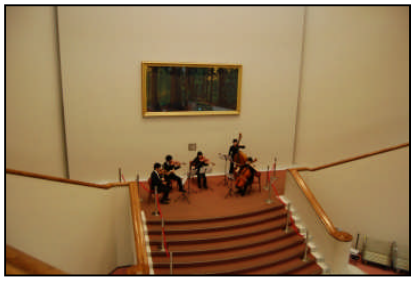
結果的には、形式の目新しさや、ツアー達成者がもらえる図書館オリジナルのクリアファイル(4種類)が興味を引いたのか、LW 期間中で 1,000 名近くの参加があった。この中には授業の一環として参加した学生の他、自主的な参加者も 200 名近くにのぼった。なお、このセルフツアーは LW 期間後も継続して実施しており、春学期末までで 250 名強の利用者が参加している。

2. 知的書評合戦「ビブリオバトル＠早稲田」

近年、人気の兆しを見せている「ビブリオバトル」（発表者がお薦めの本を、生の語りで紹介する書評ゲーム）を初めて開催した。開催実績のある紀伊國屋書店様のご協力を得て、バトラー（発表者）20 名による予選 4 回（4 月）、準決勝 2 回（5 月）、決勝 1 回（6 月）という大規模な催しとなった。予選では観戦者の集客に苦慮したが、広報の強化が功を奏し、大会の盛り上がりと共に観戦者数は増え、決勝では学外者も含む約 80 名が来場した。決勝出場者（5 名）は各々の言葉で本の魅力を熱く語り、個性光るプレゼンテーションを行った。最後に、参加者

の投票により、早稲田大学総長賞（＝チャンプ本）、図書館長賞、紀伊國屋書店賞が決定・授与され、満員の会場から惜しみない拍手が送られた。アンケートでは、「読みたい気持ちを大きくかき立てられた」、「バトラーの表現力が素晴らしかった」、「また開催してほしい」など、バトラーへの賞賛や次回を期待する声が多く寄せられた。

3. 館内でのコンサート「ライブラリーコンサート」



中央図書館内の大階段付近は2階から4階まで吹き抜けの作りとなっており、音響がすばらしいのではと想像したことがある方もいるかもしれない。この恵まれた施設環境を「音楽」に使ってみることが、この企画の1つのポイントでもあった。学内腕利きの学生音楽サークル（弦楽、ギター、マンドリン、合唱）から参加の快諾を得て、コンサートを平日昼各20分間で実施した。

利用者から騒音等の苦情があるのではという懸念があったため、事前に手渡しでチラシを配布、閲覧席には案内パネルを設置し、当日は館内放送で集客も兼ねて周知をはかった。事前の周知が功を奏したのか苦情はなく、逆に大変好評であった。学生からは「図書館に来るのが楽しくなった」、校友からも「またやってほしい！」といった沢山の感想が寄せられたことは嬉しい驚きであった。図書館で熱演する学生を間近で観られたことは新鮮な経験であり、図書館として学習・教育だけでなく文化活動の支援ができたことは意義深い。

4. 図書館学生ボランティアによる学生読書室ツアー

本学には数多くの図書館・図書室があるが、各学部に設置されている「学生読書室」を、これまで以上に活用してほしいと考え、生まれた企画。実施にあたっては、今年度より発足した、学生による図書館ボランティアスタッフ（LIVS）が主体となって運営した。「先輩」という身近な存在が案内するという「親しみやすさ」からか、参加者（新入生）が質問しやすい雰囲気を作ることができ、結果として9割近くの参加者から「役に立った」との評価を得た。

5. 学生ボランティアによる学習相談会

「先輩直伝！大学フル活用勉強法」

大学公式プロジェクト「こうはいナビ」の学生ボランティアが主体となった企画。前半は高校と大学における「学び」の違いや勉強法についての話、後半は新入生の抱える学業面の不安に直接先輩が相談にのる座談会の2部構成であった。

こうはいナビ学生スタッフ主導のもと企画の検討を行ったが、準備段階では常に職員スタッフが内容・運営面でのアドバイスが出来る体制を取っていたため、学生の主観だけではない信頼性の高いコンテンツを作成することが出来た。また、学生読書室ツアーと同じく、学生同士で気軽に相談ができる点が学生にとって魅力的に映ったのか、早々に募集定員に達した。

当日も、学生同士で活発な意見交換が行われ、先輩から真剣に学び取ろうとする後輩の姿が見てとれた。今後も学生との協働企画は欠かせないだろう。

6. 姜尚中氏講演会

LW 計画当初より中央図書館内のホールを活用したイベントを検討し続けた結果、姜尚中氏（聖学院大学全学教授）による講演会「大学で学ぶということ～君たちへのメッセージ～」として結実した。多くの参加希望が寄せられ、恐らく図書館としては初めて同時中継（井深大記念ホール、所沢キャンパスの 2 か所）を実現した。結果 179 名もの参加があり、好評を得た。また、質疑やアンケートを通じて大学生活に「戸惑い」や「迷い」を感じている学生らの存在に気づく好機となった。今後も図書館に関連した講演会を継続して開催し、学生生活の充実につなげたい。

7. 情報検索講習会

「レポート作成に役立つ！図書館資料の探し方」

新入生を主な対象とし、レポートを書くうえで必要となる図書、論文、新聞記事の基本的な探し方を紹介した。同様の講習会は今までグループ学習室で実施してきたが、今回は初めて学習コーナーで行った。学習コーナーは PC が設置されたオープンな空間であるため、準備が軽減されるだけでなく、講習会の様子が多くの来館者の目に留まることで、図書館の取り組みが伝わる効果もあると考えた。期間中に実施した 2 回とも参加者は 10 名程と満席にはならなかったが、その分個々人の様子を確認しながら進めることができ、実習の時間には英語や中国語のデータベースを使いたいといった個別の要望にも対応できた。参加者のなかにはセルフツアーと合わせて参加した学生もおり、図書館の利用方法を体系的に学ぶことができて良かったとの感想が寄せられた。

8. 映像資料上映会『プロフェッショナル仕事の流儀』

「映像資料」の存在を、新入生をはじめとした図書館利用者に広く伝えること、利用者の誰もが参加できるイベントとして、LW の参加者の枠を広げることを目的に、映像資料上映会を開催した。上映資料の選定に際しては、学生の関心を引く内容でかつ館内上映が可能であるかに留意した。最終的に NHK の『プロフェッショナル仕事の流儀』から、人気漫画家の井上雄彦氏、また社会で活躍する本学の卒業生、佐藤章氏と及川卓也氏が取り上げられた回を上映した。特に就職活動中の学生から好評を得たが、学生以外の利用者からも高い満足度を得ることができた。今後の課題としては、上映会開催の意義をよりわかりやすく伝え、映像資料の利用促進につなげること、広報手段を工夫し、より多くの利用者に参加してもらうことが挙げられる。

9. 書評展示「この本、いいね！」

書評の掲示は過去にも行われたが、今回は「ゆるく」参加できるよう、「いいね」と思った書評の脇にシールを貼ってもらう形とした。結果、シールは期間中に約 100 枚、最終（春学期末）で 509 枚貼られ、一定の支持を得たと言えよう。書評自体は過去に集めたものを再利用し手間を省いた一方、シールを貼るときの触感や貼った後の視覚効果を考え、小さなものではなく大きめ（直径 20mm）のものを選ぶなど工夫した。

10. ライブラリークイズ

Waseda-net portal の申請機能を利用し、Web 上でクイズを実施した。クイズの出題内容は図書館利用、図書館サービス、トリビア等の内容から全 20 問を厳選し、16 問以上正解した参

加者にはもれなく図書館オリジナル絵葉書セットをプレゼントすることで、エンターテインメント性を持たせた。

広報手段として、図書館 HP 内の NEWS での案内のほか、Facebook・Twitter といった SNS での情報発信もこの LW を機に試みたが、結果として参加者数はさほど多くはなかった。今後は、クイズの参加方法や広報手段を再検討し、より学生が参加しやすい形式を考える必要がある。

正答率は比較的高かったと言えるが、クイズの誤答傾向から、「学生が何を知っていて、何を知らないか」ということを読み取ることができ、学生の図書館利用に関する理解度を計るツールとしても利用できることが分かった。

11. 戸山図書館セルフツアー

館内各階に説明パネルとスタンプポイント(5ヶ所)を設置し、全てのスタンプを集めた参加者には中央図書館と同じ景品(オリジナルクリアファイル)を渡した。中央図書館のセルフツアーのように授業の課題とは位置づけられなかったため参加者数は 41 名にとどまった。

12. 資料展示「新入生にすすめる本」(戸山図書館)

文学学術院の教員、助教、助手の方々に推薦していただいた 73 タイトル 89 冊の図書を推薦文とともに展示した。展示した図書は貸出可とし、推薦図書のリストも持ち帰れるように用意した。推薦された図書、推薦文がたいへん興味深く、よい企画であったと思われる。

13.「古典籍総合データベース体験」(戸山図書館)

紀伊國屋書店様よりタッチパネル式大型ディスプレイを借用し、本学の「古典籍総合データベース」を自由に使ってもらえるように設置した。お薦めコンテンツとして『南総里見八犬伝』、『維新志士遺墨』等を紹介した操作ガイドを用意した。大型ディスプレイは目につくようで、興味を持って触れてみる学生が多かった。結果、設置した端末からの古典籍データベースへのアクセスは、期間中 700 件にのぼった。

◆まとめ

図書館としてこのような大規模なイベントを行うのは今回が初めてであり、単純に過去との比較はできないが、参加者の反応は各イベントのアンケート等から概ね好評だったと受けとめている。この LW が全新入生に行き届いたとは決して言えないが、図書館職員としては一定の達成感を得ることができ、学内他部署からも前向きなコメントが寄せられた。初めての試みということもあり、至らない点も多かったが、今後も改善を重ねながら継続して取り組んでいきたい。また、イベント実施により新たに気付かされたことも多かった。その主だったものを挙げておく。

- 多様性への配慮が必要(学生のニーズやバックグラウンドの理解)
- 人と人とがつながる場の提供(旧来の図書館サービスには薄かった視点)
- 勇気をもって新しいことに挑戦することの意義

最後に、参加して頂いた皆様、ご協力いただいた先生方・関係者の皆様に御礼申し上げます。

「玉篇」を携帯してきた僧のこと

久保尾　俊郎（特別資料室）

早稲田大学図書館が所蔵する「礼記子本疏義第五十九巻喪服小記第十五」1巻、「玉篇巻第九残巻」1巻の2点は、いずれも唐時代の写本で、国宝に指定されて内外に著名なものである。2点とも市島謙吉（春城）初代図書館長の時代に、田中光顕伯爵からそれぞれ明治 38 年 10 月、大正 3 年 11 月に寄贈を受けたものである。

随筆家としても名の知られた市島館長は「早稲田大学の二大奇書」（「春城漫筆」昭和 4 年刊所収）という文を書き、2書の解題とその受贈の経緯を記している。

その中で、「玉篇」が早稲田大学の所蔵になるまでの経過については、「入唐留学の僧徒に由りて将来され、平城若くは平安の寺院に蔵せられしが」「中昔の比京洛台門の寺院に在り」「江戸の末世には流転して洛中の一書肆の手に落ちた」「文化三年六月、伊沢蘭軒が京都の書肆銭屋惣四郎方に、古物数種と共に此巻を見た事を「長崎紀行」の内に記し、紙背の写経のことにも及んでゐる」「明治維新前後、秋月藩の文学礒信蔵と云ふ人の方へ一僧が此巻を携帯してきたのを信蔵が見て、其の希世の書なるに驚き、購うて之れを珍蔵し、明治六年秋月暴動の時に礒は事に坐して自裁したるが、其際も遺命して此書を護持すべきを以てしたと云はれてゐる」とある。

私は、明治初年に福岡秋月藩の磯淳（礒信蔵）が京都に出て「玉篇」を手に入れ、その没後早稲田大学の所蔵になるまでの経過と、磯の旧蔵書が伊勢の神宮文庫、九州大学附属図書館ほかにあることを、「ふみくら」No.79（2010 年 10 月 21 日刊）に寄稿した「磯淳の旧蔵書」で報告した。この小さな報告でさえ、貴重書担当に初めてつき市島館長の文を知ってから、30 年近く過ぎてできたものである。しかしこの報告でも、国宝「玉篇」の由来をかたるのに必ずといっていいほど引用される市島館長のこの文章の、磯に「玉篇」を携帯してきて購わせた「一僧」について、その正体を明らかにすることはできなかった。

もっとも「一僧」の候補者として容易に名前が浮かぶ人物がいる。それは、もう一つの国宝「礼記子本疏義」を田中光顕伯に仲介した島田蕃根（1827－1907）である。

市島館長の文章には「往年此書が下谷池之端の琳琅閣に現れた時、支那公使黎庶昌はしきりに古書漁りをしてゐたので、琳琅閣に此書を一覧して食指動いた」「翌日更に書肆を訪うて、購ふ積りであったと云ふが、其頃或る有識の学僧が毎日此の書肆を訪ふを例としたが、此書を見て、若しこれが外国に持去らるゝことがあつては甚だ遺憾だと、直ちに田中伯へ駆けつけて買はせたので、幸に日本に留め得たのである」とある。

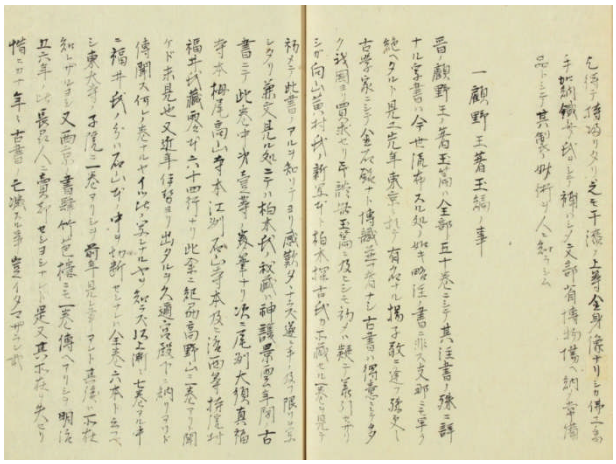
この琳琅閣にあった「礼記子本疏義」を田中伯に買わせた「有識の学僧」が島田蕃根であることは、柴田光彦氏が［明治 23 年］4 月 4 日付の島田蕃根が田中光顕伯に寄せた手紙を紹介して明らかにしている（「新鐘」第 16 号、1970 年 12 月刊）。

島田蕃根の伝記は不明な点が多いが、ある人名事典では「周防（山口県）徳山出身。「みつね」ともいう。家は代々天台宗本山派修験道の行者で、仏教、儒教、神道を深く学び儒家らとの親交も深かったため、幕末徳山藩主の命に依り京畿に赴き勤皇説を唱える。維新後、廃藩置県に尽力したのち上京し、教部省内務省社寺局を歴任し明治初期の宗教行政の確立に務めた」（「朝日日本歴史人物事典」）とある。一方島田蕃根は愛書家としても知られており、「愛書の念が強く、自ら集書に努めるとともに種々の方策を講じた」（「日本古典籍書誌学辞典」）と評されている。「礼記子本疏義」を日本に留め置いた工作などはその面目躍如たるものがある。

これを考えれば、明治元年から3年にかけて京都の大学校で教えるために在京していた磯淳のもとに「玉篇」を携帯してきて購わせた「一僧」が、藩主の命で幕末に京畿に赴いていた、愛書家で修験僧の島田蕃根であったとしてもおかしくはない。

もしそうであれば、早稲田大学図書館が蔵する 2 点の国宝が館蔵に帰するまでに、同一人物が関与していることになって、はなはだ興味深いことである。私は、「徳山市史」「島田蕃根翁」などの島田に関する伝記資料や、京都大学の「島田文庫」を調べたりしたが、決め手になる手がかりはなく長い年月が過ぎた。

ところが、2010 年に「ふみくら」に書いてから1年少し過ぎたころ、古書肆の目録から選書して図書館で購入した、西村兼



西村兼文著「随見録」(イ2－5248)

文著「随見録」6冊(写本)を眺めていて、「ひょっとしたら」と思わせる記事が目に入った。西村兼文(1829－1896)は京都の人。もと本願寺の寺侍で、古書の解題に尽力した人物である(「国書人名事典」)。

「随見録」には108件の書画典籍類についての考証解題が記述されているが、その第2冊目に「顧野王著玉編ノ事」という項目がある。

それによれば、「玉篇」は現在の中国にもない本だが、先年東京で古学家、博識の楊子(守)敬に逢ってその話になった。西村は、最初は「玉篇」が我が国にあることを信じなかったが、向山黄村写本、柏木探古蔵本を見て、「玉篇」があることを知って「感歎タヽナラズ遂ニ手ノ及フ限リヲ写シタリ」とある。

そして、以下我が国にある西村兼文が実見未見の「玉篇」の諸本7本を揚げ、その他に東大寺の子院にあった1巻を見たが、其の後所在不明であることを述べた後、末尾の文として、「又西京ノ書肆竹苞楼ニモ一巻伝ヘアリシヲ明治五六年ノ比長州人ニ売却セシヨシナレド是又其所在ヲ失セリ、惜ヒカナ年々古書ノ亡滅スル事豈イタマザラン哉」とある。

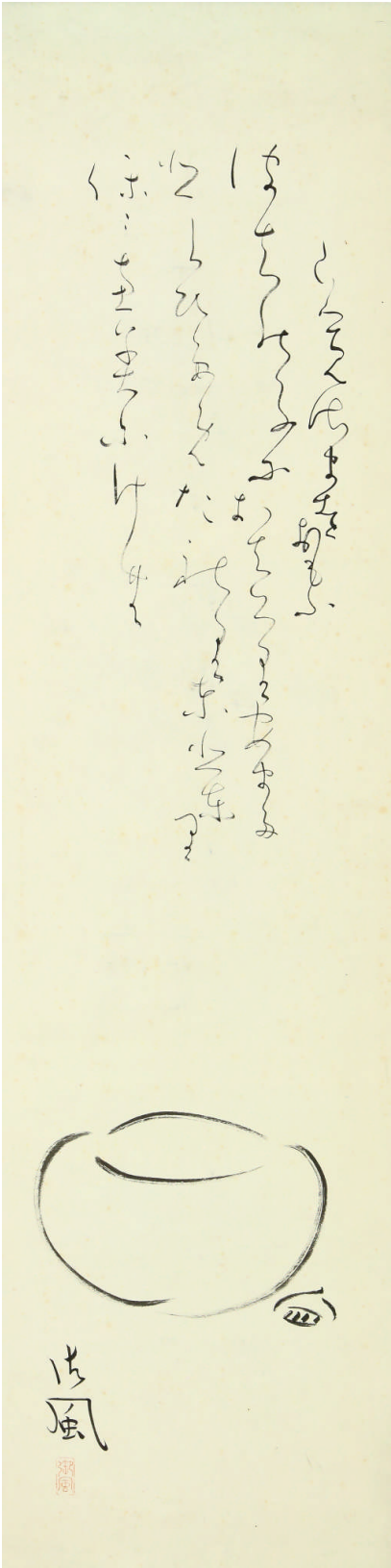
この末尾の文の1巻は、正しく現早稲田大学図書館所蔵の「玉篇」を指すと思われる。

「西京ノ書肆竹苞楼」とは市島館長の文「早稲田大学の二大奇書」中にある「書肆銭屋惣四郎」のことである。市島文では、その銭屋から直接もたらしたか定かではないが、銭屋にあった「玉篇」を「一僧」が携帯してきて磯に購わせたとある。西村文では、その「一僧」は竹苞楼が売却した「長州人」にあたると考えられよう。その「長州人」とはだれか。私はそれまでに長い間調べていたので、すぐに修験僧島田蕃根のことを思い浮かべた。島田は周防徳山出身で所属した徳山藩は長州毛利藩の支藩にあたり、「長州人」とよばれることもありうる。島田蕃根が幕末に京畿に出ていたことは前述の伝記に記されている。

もっとも、この西村兼文の記事は伝聞であり、明治5、6年のころに売却とあるが、磯淳は明治4年には福岡秋月に帰郷して私塾を開いており(「日本教育史資料」明治25年刊)、京都で「一僧」から「玉篇」を購入したのは明治3年以前のことと考えられる。「随見録」記載の最新記事は明治16年のものであるから、西村が「顧野王著玉編ノ事」を書いたのは、磯の購入の時点から10年以上の歳月が過ぎていたであろう。しかし西村兼文が、我が国残存の「玉篇」のうち、竹苞楼にあった本、すなわち現早稲田大学図書館所蔵の国宝「玉篇」の事情について記しているのはほぼまちがいない。西村の記事は正確なものではないが、「玉篇」を携帯してきて磯淳に購入させた「一僧」の具体的な人物像が浮かんできたのは、私にとっては、今まで残してきた課題の答えが不十分ながら見えてきたようで、今後の調査に期待をもたせることである。

相馬御風歌幅「はちの子に」

松本　智子（特別資料室）



【図版1】

早稲田大学校歌「都の西北」を作詞したことで知られる相馬御風（1883－1950）は、新潟県糸魚川に生まれ、本学英文科に学び、「早稲田文学」の編集に従事するとともに、自らも多くの評論や作品を残した。大正5（1916）年、33歳にして東京を離れ、郷里の糸魚川で暮らすようになってからは、江戸時代の僧良寛（1758－1831）に傾倒し、晩年に至るまでその研究を続け、20冊にもおよぶ関係書籍を著している。当時、歌人や画家、書家など様々な分野の人々の間で良寛が注目されており、その中でも御風は市島謙吉（春城）をして、「良寛研究の第一人者」（注1）と言わしめたほどの業績を残している。

彼の自筆資料の多くは糸魚川歴史民俗資料館《相馬御風記念館》に所蔵されるが、「お膝元である旧糸魚川町区域では「一家に一点以上ある」といっても過言ではない」（注2）と言われるほど巷間にも流布している。当館でも、校歌をはじめ、数点の自筆資料を所蔵するが、このたび興味深い資料を収蔵できたので、以下に簡略な紹介を行っておきたい。

当館がこれまでに収蔵した御風自筆資料は次の通りである（請求記号順）。

「越後より」草稿	へ2-8100-39
相馬御風短歌「ふきのたうの」	へ4-8129
「わかり切った事？」	へ10-7255
「びろうな話」草稿	へ10-7366
「雪は消えて春は来る」原稿	へ10-5411
早稲田大学校歌	ト10-1753、ト10-2268、ト10-2749
相馬御風短歌「大そらを」	ヌ4-4899-34
相馬御風書簡帆足圖南次宛	ヌ4-4899-35、36
「追憶二三」草稿	文庫14-A175
相馬御風和歌画讃「しばらくは」	文庫14-B78
同「たちとまり」	文庫14-B79
相馬御風書簡本間久雄宛	文庫14-C56

これらの中には、良寛の住していた五合庵を訪ねた際に詠んだ画讃「たちとまり」や、良寛の妹妙現尼について書き記した「相馬御風書簡本間久雄宛」はあるものの、その半生をかけて取り組んだ良寛研究に関する資料は少ない。

このたび収蔵した自筆資料（以下、本資料とする）【図版1】は、御風が愛慕してやまない良寛を詠んだ和歌画賛である。

本年7月に行われた明治古典会第48回七夕古書大入札会において落札した。

資料名　相馬御風歌幅「はちの子に」

形態　1軸　紙本墨書

寸法　縦133.1×横33.5㎝(外寸205.0×52.7㎝)

請求記号　チ6-4786

〈釈文〉　良寛さまをおもふ

はちの子におちくりあまた

ひらひためたれりとひとり

ほゝえみにけむ

御風「御風」(朱長方印)

歌意を考慮し整定本文を示すと次のようになる。

良寛さまを思ふ

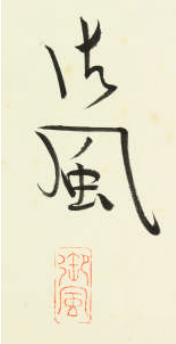
鉢の子に落ち栗あまた拾ひため

足れりと一人微笑みにけむ

鉢の子とは僧侶が托鉢の時に所持する器のことで、良寛が常に携帯し、また和歌にも好んで詠んだものであり、手鞠とともに良寛を象徴するものと言える。「ひらう」は「ひろう(拾)」に同じ。歌意は「鉢の子に落ちた栗を沢山拾い集めて、これで十分だと良寛さまは一人微笑んだのだろうなあ」。歌を理解すると、本紙に描かれた一見分かりにくい絵は、鉢の子と栗であることが首肯されよう。

当該歌ならびに〈鉢の子と栗〉の画は、御風が好んで筆を執ったもので、糸魚川歴史民俗資料館《相馬御風記念館》や出雲崎の良寛記念館にも複数所蔵されており、『相馬御風遺墨集図版篇』(注3)で確認することができる。

いずれの資料も、制作時期が不明でかつ当該歌は御風のどの著作にも見出せないため、いつごろ詠まれたものか俄かに判断しがたい。ただし、本資料については、その落款【図版2】から昭和10年から15年ころに揮毫されたものかと推定される(注4)。



【図版2】

昭和10年から15年ころといえば、御風の著作において『良寛百考』『続良寛さま』(ともに昭和10年刊行)、『良寛と貞心』『良寛和尚』(ともに昭和13年刊行)、『一茶と良寛』『良寛を語る』(ともに昭和16年刊行)など、良寛に関するものが次々と上梓された時期で、その中には以下に示すように「良寛を思う」「鉢の子」「栗」といった当該歌を構成する要素が散見される。紙幅の都合で本文を全て掲げることはできないが、『続良寛さま』には詩「栗焼き」を載せ、良寛歌「月よみの光を待ちて帰りませ山路は栗の毬の多きに」に関する短文「栗のイガ」も収録する。また、御風の良寛研究の集大成ともいうべき『良寛を語る』では、「良寛さまをおもふ」という詞書を持つ自身の歌を扉の図版として掲載している。更に、同書に収録された「良寛さまの鉢の子と雲照律師」では「置き忘れられた鉢の子の取り上げられるべき時が来たのだ」と述べ、「時局下良寛をおもふ」では「かゝる時局下に於てこそ、私たちは良寛和尚を思ふべきである」と強く主張する。

御風一人雑誌『野を歩む者』でも、昭和12年刊行の第41号と翌年刊行の第45号にそれぞれ所蔵者の異なる「良寛和尚遺愛の鉢の子」を写真図版としている。

本資料は、上記のような著作と連動して制作されたことは間違いなく、良寛研究に心血を注いだ御風の昭和10年代前半における意識を端的に示す貴重な資料と言えよう。

なお、本資料は御風自筆の早稲田大学校歌などとともに、図書館企画展「人がうたをつくるとき」(於早稲田大学総合学術情報センター2階展示室、2013年10月18日～11月20日)において展示される。是非とも御覧頂きたい。

(注1)『擁炉漫筆』所収「『続良寛さま』を読む」(書物展望社、1936年刊行)に拠る。

(注2)『相馬御風遺墨集　資料研究篇』(相馬御風遺墨集刊行委員会、2010年刊行)「後記」(小林猛生執筆)に拠る。

(注3)相馬御風遺墨集刊行委員会、2010年刊行

(注4)糸魚川歴史民俗資料館《相馬御風記念館》小林猛生氏のご教示によると、本資料に押された印は「昭和10年ころから晩年まで使用されたもの」とのこと。署名については『相馬御風遺墨集　資料研究篇』所収の岡村鉄琴「書を中心とする相馬御風像」、「署名の変遷」参照。

2012 年度図書館主催展覧会報告

展 示 委 員 会

早稲田大学は 2012 年、前身である東京専門学校から数えて創立 130 年を迎えた。図書館の歴史は大学とともに歩んできており、これまでに数多くの貴重な資料が収蔵されてきた。ただ、そうした貴重な資料を、誰もが好きな時に手にとってみられるわけではない。一人でも多くの人にそうした貴重な資料の存在を知ってもらい、教育、研究に役立ててもらうために、図書館では毎年展覧会を開催してきた。2012 年度も例年通り春と秋に図書館企画展を開催、多くの来場者に恵まれた。

〈図書館新収資料展〉 新しい早稲田の宝

会　期:2012 年 11 月 7 日(水)～12 月 19 日(水)

会　場:総合学術情報センター2階展示室

図書館には毎年数多くの資料が収蔵される。それらのほとんどが一般の開架スペースに排架され、利用に供されているが、古書、貴重書とされるものについては古典籍総合データベースを通して画像をご覧いただくことはあっても、現物と接する機会はあまりない。図書館ではあらたに収蔵した貴重な資料について多くの方々に知っていただくべく数年に一度新収資料展を開催しているが、今回は、前回(2005 年)から数えて7年ぶりの開催となった。少し間が空いてしまったが、その分充実した内容を楽しんでいただけたことと思う。

古書、貴重書の収集手段としては、既存のコレクションとの関係に配慮しつつ新たに購入するケースもあるが、有志の方々からご寄贈いただくこともまた多い。図書館では、ご寄贈くださる方の「自分たちがしっかりと守ってきた資料を末永く保存し、広く公開してほしい」という強い思いに応えるべく、すべての資料が後世に伝えるべき文化財であると同時に、現在の研究者のための活きた資料であると考え、整理、公開につとめている。今回出陳した資料の中にも寄贈されたものが多く含まれていた。今後寄贈していただく資料についても、折を見て、展覧会などを通して皆さんにご覧いただく機会を設けてゆきたいと考えている。

図書館所蔵肖像画展　面影をたずねて

会　期:2013 年 3 月 22 日(金)～5 月 22 日(水)

会　場:総合学術情報センター2階展示室

館蔵の古書、貴重書の中には、肖像画や人物が描かれたさまざまな作品が収蔵されている。それらの中から選んだ古代から近代までの肖像画を「忘れがたき風貌」と題してご覧いただいたのが 2002 年 10 月のことであった。本展はそれから 10 年以上の時を経て、あらたに収集した資料を中心により充実した内容で開催したものである。今回は近世の国学者や洋学者、俳人、戯作者に対象を絞り込んだが、同一人物を描いた複数の作品を並べて展示し、比較できるようにするなど、構成にも工夫を加えたことで、じゅうぶんに観賞にたえるものとなったと自負している。

一口に肖像画と言っても、その描き方はさまざまである。もちろん写真ではないので、その人の姿そのままではないが、特に描かれた人物と描き手の関係が近いとき、確かにこんな感じの人だったのかもしれないと思わせる作品となっている。また、同じ人物でも描き方一つで随分と違った印象になることもあり、来場者にはそれぞれの見方で楽しんでいただけたと思う。

大学は今、積極的な情報発信を求められており、研究分野の垣根を超えたさまざな成果が学内の研究者、研究機関から発信されている。図書館が所蔵する資料や情報が、そうした成果を生み出す基盤となっている場合が数多くあるであろうことは言を俟たない。特に図書館の場合、資料、情報を活用するのは学内者に限らない。広く世界の研究者が、その内容に注目し、活用している。いかに多くの方たちに、図書館の持つ資料、情報を知っていただけるか、展覧会は「図書館からの情報発信」のための重要な手段だと考えられる。今後も、積極的かつ独創的な発信につとめてゆきたい。

最近の大口寄贈図書報告（2011．1－2013．6）

資 料 管 理 課

２０１１年以降に受贈したものから主なものを報告します。寄贈いただいた資料は、原則として図書館に処理を一任いただくことを前提としており、有効に活用させていただいています。ご寄贈者各位ならびにご仲介くださった皆様に改めて篤く御礼申し上げます。

	受贈	寄贈者（仲介者）（敬称略）	収集者（敬称略・故人を含む）	資料内容・数量
1	2011年4月	江中千佳（文・渡部直己教授）	江中直紀（文学学術院教授）	文学評論・詩（和書・洋書）104 箱
2	2011年7月	桑原瑛子（高戸寧）	桑原俊博（日賀出版社）	哲学・宗教（和書）811 冊
3	2011年9月	平木京子（社・佐藤洋一教授）	平木収（芸術学校教授）	写真・美術（和書・洋書） 68 箱
4	2011年10月	上野美子（文・冬木ひろみ教授）	上野美子（都立大学名誉教授）	英文学（洋書） 18 箱
5	2011年11月	諏訪佐知子	諏訪貞夫（名誉教授）	フランス経済学（和書・洋書） 40 箱
6	2012年4月	江崎洋一郎（教育・藁谷友紀教授）	江崎眞澄（元衆議院議員）	和書 214 箱
7	2012年6月	筑波常秀（筑波和俊）	筑波常治（政治経済学部教授）	和書・洋書 410 箱
8	2012年6月	飯嶋一泰（政経・室井禎之教授/文・藤井明彦教授）	飯嶋一泰（文学学術院教授）	ドイツ文学・ドイツ語（和書・洋書） 88 箱
9	2012年7月	阿部昌彦	阿部昌彦	日本文学（和書）16 箱
10	2012年10月	河原宏（長由美子）	河原宏（名誉教授）	日本政治思想史（和書・洋書） 70 箱
11	2012年11月	新井信（参与　小玉武）	新井信（校友）	新聞・ジャーナリズム（和書） 約 700 冊
12	2013年3月	井内敏夫	井内敏夫（文学学術院教授）	ポーランド史（洋書）28 箱
13	2013年5月	村岡洋一	村岡哲（教育学部教授）	ドイツ史（洋書） 13 箱
14	2013年5月	寄本光子（岡本三彦）	寄本勝美（名誉教授）	和書・洋書 約 700 冊
15	2013年6月	山本勝弘	山本勝弘（名誉教授）	数学他（洋書・和書）94 箱
16	2013年6月	吉田順一	吉田順一（名誉教授）	モンゴル語・中国語 81 箱

（文責：宇田川和男）

図 書 館 だより

2013 年 1 月～9 月　図書館日誌(中央図書館)

1.29　電子媒体検討委員会(第 2 回)
2.1　図書館学習支援連携委員会(第 12 回)
2.5　図書館協議員会(第 4 回)
3.25　卒業式につき図書館を開放(3/26 まで)
4.1　入学式につき図書館を開放(4/2 まで)
4.13　Library Week を開催(4/19 まで)
6.28　図書館協議員会(第 1 回)
7.22　夏季長期貸出(8/30 まで)
7.23　西早稲田中学校職業体験(7/25 まで)
8.3　夏季休業期間につき開館時間短縮(9/20 まで)
8.3　オープンキャンパスにつき図書館を開放(8/4 まで)
9.9　慶應義塾大学・立教大学実習生研修
(3 名、9/20 まで)
9.25　図書館学習支援連携委員会(第 13 回)
9.30　Library week を開催(10/5 まで)

～Pulsus～

大学図書館にいちばん通っていた時期は英国ケンブリッジ大学の博士課程に在籍していた三年間だった。午前中は寮の部屋でコンピュータに向かって文章を書き、午後は図書館で参考図書を調べたり、本や雑誌論文をリーディングルーム(閲覧室)で読んだりした。そして図書館のティールーム(喫茶店)で気分転換のコーヒーを一杯飲み、博論の進み具合や最近読んだおもしろい本について友達と話し合う。当時～もはや二十五年も前だが～多くの人文系の大学院生はそのように毎日を過ごしていた。大学図書館は勉強する場所と同時に友達に会う場所、時にロマンスも生まれる場所だった。インターネットや電子図書・オンラインジャーナルの普及は確かに便利さをもたらし、図書館に行かなくても本や論文が読める。がそれでは何かが失われたように思う。いろいろな可能性を秘めている場所だから、ぜひとも部屋を出て図書館に行こう！

ゲイ　ローリー　：　法学学術院　教授
(図書館副館長)

［表紙写真］

相馬御風自筆「早稲田大学校歌」　1 額
ト 10－2749

早稲田に関係する人々にあらゆる場面で歌い継がれてきた早稲田大学校歌。この歌は、明治 40 年(1907)の大学創立 25 周年記念祝典にあわせて作られた。歌詞は最初懸賞で募集したが、ふさわしい作品がなかったため、審査にあたっていた坪内逍遙、島村抱月が、早稲田の卒業生で詩人の相馬御風に依頼をした。
表紙写真は 3 番から成る歌詞のうち、1 番部分。
なお、本資料は右記の展覧会に展示されている。

＜展覧会のお知らせ＞

下記の日程で展覧会を開催しています。みなさまのご来場を心よりお待ちしております。

＜図書館企画展＞
「人がうたをつくるとき
― 万葉集から校歌まで ―」

会期：2013 年 10 月 18 日(金)～11 月 20 日(水)
会場：総合学術情報センター2 階展示室
時間：10:00～18:00
閉室：日曜日および 10 月 31 日(木)
但し、10 月 20 日(日)は開室

早稲田大学図書館報　ふみくら No.84　2013 年 10 月 21 日発行　2,500 部
発　行　人／飯島昇藏
編　集／荘司雅之 ・ ティムソン　ジョウナス ・ 藤原一智 ・ 真島めぐみ
発　行／早稲田大学図書館　〒169-8050　東京都新宿区西早稲田 1-6-1　電話 03-5286-1652
ISSN　0289-8926